

囚になつた見習い騎士は
敵国の最強騎士に拾われる

登場人物紹介

▼リカルド

フランティア王国の見習い騎士。
囹として砦に置き去りにされた際に
敵将のセイブリアンと出会い、捕虜となる。
黒目黒髪で平凡な見た目をしているが真面目で頑張り屋。



▼セイブリアン

アルカンターゼ帝国の第五皇子。
ソードマスターとして、領地である
ベイリーの騎士団団長も務める。
強面で体格が良かったため威圧感はあるものの、
誠実で、部下から信頼されている。

▼ユリウス

アルカンターゼ帝国の皇太子。
弟のセイブリアンによく似ているが、印象は優しい。



▼ルーセント

ベイリー騎士団の副団長。
キツめの美形で、参謀のような役割を担っている。



▼ミケール

フランティア王国の第二騎士団団長。
リカルドに囹になるよう命令したが……



▼アルジエン

ベイリー騎士団の見習い騎士。
何かとリカルドの世話を焼いてくれる。



第一章 囧になった男

「お前だ」

長い指先が自分に向けられた時、リカルドは、ああやっぱりと思った。

自分は身分が低い上にろくに剣を使えない、まだ見習いの騎士だ。普段から邪魔者扱いされていたので、こういう時に真つ先に捨てられると予想していた。

いつか捨て駒になると……

だけど、いつか立派な騎士になるんだと父親に言われたことを思い出したら、逃げ出すことなどできなかつた。

「上級騎士の鎧を着させろ。手練れがいると思われたら、それなりに時間が稼げるだろう」

補給部隊の一人として戦いに参加したりリカルドは、憧れていた上級騎士の鎧を身に着けることになった。しかしそれは死装束という意味で、求めていたものとは大きく違う。

「お前も国の役に立つ時が来た。本望だろう？」

膝をつけて地面を見ていたりリカルドは、はいと言って頷く。

そうするしかない。

「帝国の部隊はすぐそこまで来ている。いいか、一分一秒でも長く、奴らをここに留めるんだ。首の皮一枚になっても、喉元へ喰らいつけ！ 役立たずのまま死にたくはないだろう。分かったか！」

リカルドは無言で胸に手を当て、騎士団の服従のポーズをする。それを見た第二騎士団団長のミケールは満足そうに笑い、では行くぞと言って踵を返す。サイズの合わない甲冑が今にも脱げてしまいそうなのを、リカルドは必死に押さえた。

唇を震わせ、部隊が消えていくのを見送る。

それが自分の最後の役目だった。

リカルドは大陸で二番目に大きいとされるフランティア王国に生まれ、今年二十六歳になる。父親は騎士だったが、足を悪くして引退し、母親と共に町で酒場を営んでいた。

リカルドは黒髪に黒目の父によく似ており、幼い頃から木剣を振り回して遊ぶ活発な子供だった。昼間店が開いていない時は、裏手にある空き地で父親から剣を習う。将来は騎士になりたいと言うと、父は喜んでくれた。

兵士募集の張り紙を見て、町の自警団に入ったのが十二の時。そこで日々訓練に明け暮れ、努力が認められた結果、騎士見習い試験に推薦してもらえることになった。年に一度の試験に二回落ちて、やっと十六の時に騎士見習い試験に受かり、晴れて入団が叶う。

平民で騎士見習いに受かるのは、ほんの一握りだと聞いていたので、自分には才能と実力があると自信がついた。父と母にも喜んでもらえて、何もかもが順調だった。

数多の功績を上げて、華々しい人生を送れる。もしかしたら、最上級騎士である王族専属の聖騎士になれるかもしれない——そんな夢を見た時もあった。

それから十年。

次々と後輩が騎士に昇進していく中、リカルドはずっと見習い騎士のままだった。しかも最初は触らせてもらえた剣も途中から取り上げられて、雑用ばかりやらされるようになったのだ。厄介者扱いで、周囲から無視されることは日常茶飯事だった。

リカルドの立場は、いつだって薄氷を踏んでいるようなものだ。いつ見習いをクビになるかわからない。それでも父の期待を胸に、必死で地面を這いつくばって生きてきた。

しかし、それももう終わりだ。

『砦を捨てる』

みんなの前で団長がそう口にしたのは一時間前だ。フランティア王国の隣には、大陸一大きな国、アルカンテーゼ帝国がある。もう長い間、両国の間では領地をめぐる小競り合いが続き、至るところで戦闘が行われていた。

両国の強さは拮抗していたが、近年は帝国の方が有利で、フランティアは弱体化していった。その背景には戦地の厳しさなど知らず、贅沢を謳歌する貴族の存在があった。

王都には王都の戦いがあると言われていた。貴族達は自身に有利な政治を求めて次々と派閥を作り、誰かが台頭しては暗殺され消えていく。

そんな貴族達の暮らしを守るために、最前線で戦う王国の兵士達。それを束ねる騎士団にも複雑な事情があった。貴族の息子達は幼い頃から剣を学ぶが、騎士は家督を継がない男子が身を立てるための抛り所となっている。ある程度のところまで進むと、実力や運は意味をなさない。家の位の高さが全てに影響するのだ。

第一騎士団は高位貴族、第二騎士団は下位貴族、第三騎士団は平民で、特に下位貴族は出来の悪い子息の寄せ集めとなっていた。平民の中でもランクがあり、それなりの額を献金しなければ騎士にはなれない。どの条件も満たせない者は、運良く入団できたとしても一生騎士見習いで、戦場では最前線に立たされて死んでいくのが運命だ。

騎士になることを夢見たリカルドは、現実を知って絶望した。騎士見習いとして配属が決まったのは、第二騎士団の部隊だ。ここは家が高位ではないが、プライドだけが低い男達の集まりであった。

しかも、ある出来事をきっかけに、リカルドはますます疎まれることになる。見習いというのは名ばかりで、世話係という使いっ走りの雑用がリカルドの仕事となったのだ。

そしてそれも、もうすぐ終わりを迎える。

第二騎士団の団長ミケール・ワインズは、プライドの高さだけは王族並みだと揶揄されていた。

騎士長が集まる朝食会で、第一騎士団の団長にろくな功績がないとバカにされ、戦果を挙げてみると大口を叩いた。そのため無理な作戦を立て、北東のアルカンテーゼ国境沿いに急ごしらえで砦を建てた。なかなか落とせないと言われていた北東部を攻めて奪い取り、功績を上げようとしたのだ。

しかし、プライドと欲だけで動いた男の作戦は穴だらけで、戦力を集中させて一気に攻め込んだものの部隊は次々と倒れて、あつという間に後退させられてしまった。

自軍の兵は消えていき、どんどんと迫ってくる帝国兵の影にミケールは頭を抱えた。このままだと本部隊も全滅するという段階で、ミケールはついに砦を捨てることを選択する。

補給部隊として砦に着いたばかりだったリカルドは、他の騎士達と一緒に作戦室に集められた。一般兵は負傷者が多いため、この中の誰かが囮になって最後まで抵抗しろと言われた。誰もが顔を見合わせ、残りたくないと言った。手を挙げる者などいない。

そうして白羽の矢が立ったのが、リカルドだったのだ。

やることはやった。

跳ね橋を上げて、落とされないようにロープでキツく固定した。砦の周囲に小さな落とし穴を掘り、容易に進めないような仕掛けも作った。リカルドが頭を働かせてできたことはそのくらいだ。

そもそも急ごしらえで造られた砦に敵襲に対抗できるような設備は整っておらず、自力で門を押

さえるだけしかない。あるもので簡単なバリケードを作った後、リカルドはため息をついて、しっかりと塞いだ門の前に立った。

手元には錆びて刃が折れた剣のみ。首の皮一枚になっても戦えと言ったくせに、慌てて逃げ出したからか、まともな武器すら渡してくれなかった。ひどすぎるだろうと泣きたくなる。

今ごろ自軍の部隊は山道を進んでいる頃だろう。そこを抜ければ広い平地に出るので、それまでは持ち堪えろと言われている。山道を進んでいる時に矢を受けたら命取りになるからだ。

「遅いな……」

すぐそこまで来ていると言われたが、こちらの出方を窺っているのか、帝国兵が砦を攻め込んでくる様子はない。壊れた剣を構えたまま立ち続けるのも疲れてしまった。リカルドは、ガチャガチャと甲冑の音を鳴らして地面に寝転ぶ。兜の隙間から青い空が見えた。柔らかな陽が体に降り注ぎ、どこからか鳥の声が聞こえてくる。

囧としての死を前にして、なんとも言えないのんびりした空気に気が抜けてしまう。ぎゅるるると腹の音が鳴り、昨日から何も口にしていないことに気がついた。

「ははっ、俺らしい最期だな……」

せめて腹いっぱい好きなものを食べたい。見習いになってからは残飯しか食べられなかった。母親が作ってくれたシチューをお腹いっぱい食べた時を思い出し、リカルドは目をつぶる。

こんな時に別れを言いたい恋人でもいたら、また違ったのかもしれない。リカルドは背が高くな

いし、人に自慢できるような筋肉もない。見た目も黒髪に黒目という平凡な容姿で、色気のかけらもなく年齢よりも幼く見られた。

おまけに先輩騎士から、グズ、のろまと呼ばれていたリカルドは、全くモテなかった。

騎士の溜まり場は着飾った女性達が接客してくれる酒場だったが、勇気を出して店の女性をデートに誘ったものの、「冗談やめて」「やあよ、童貞臭い」「勘弁してよ」と次々に言われた。

「あー、せめて女の子とキスがしたかった」

異性と手を繋ぐこともなく死んでいく自分を思うと、虚しくてやりきれない。同時に今まで散々こき使われた上に、こんな時に後は任せたと武器も与えず捨て置かれることに腹が立って仕方がない。

今なら何を言っても許される。罰する者はもういないのだから。

「あークソ！ ムカつく！ ミケールのアホ野郎！ 尻に一撃喰らわせてやればよかった!!」

大声で団長の悪口を言ったら、思いのほかスッキリして胸が軽くなる。たまには愚痴っておくべきだったと、後悔が一つできた時、砦の門がいきなり轟音を立て崩れ落ちた。

一瞬の出来事で何が起きたのか分からず、飛び起きたリカルドはただ驚き、うわあと声を上げるしかなかった。その後、門にめり込んだ巨大な石を見て大きく口を開けた。

「う……嘘、だろ……。投石機か?」

重要な城を攻めるのに使われることはあるが、数が限られていて、移動にも人手がいる。こんな

小さな砦を落とすのに使用するなんて、帝国とはなんて恐ろしいのだろう。

そのまま動けずにいると、門にめり込んだ石からメラメラと火が燃え出し、あつという間に門とその周囲に置いていたバリケードが燃えた。火矢が飛んできたにはあまりに早い燃え方に、普通の火でないことを直感で理解する。危険を察知する能力が長けているリカルドは、これはマズいと思退りして砦の奥に逃げ込んだ。会議室近くの木箱が積まれた物置の後ろに身を隠す。

こんなことをしても無駄だとは分かっている。けれど、普通に剣で殺されるならまだしも、あの火に焼かれたくないと思ったのだ。あれはおそらく、ソードマスターと呼ばれる剣を極めた者だけが使える力。力が炎となって剣に宿り、それを振るうだけで火を自由に操ることができると思われる。王国のトップである聖騎士の中でも使える者は少ない。

これまで話には聞いていたが、リカルドは会ったことも見たこともなかった。

「猛火の騎士……」

小さく縮こまつたりカルドは、ブルツと震えた。

王国に古くから伝わる伝説の剣の使い手は、火の竜巻を起こすと言われており、猛火の騎士と呼ばれていた。その火は普通の熱さではなく、壮絶な痛みを伴い、魂まで焦げると言われている。そんな恐ろしいもので焼かれて死ぬなんて、絶対に嫌だった。

しばらくすると、わああという声とたくさんの足音が聞こえてきて、帝国兵が侵入してきたのだと分かった。

もう終わりだ。

首の皮一枚になつても死守しろと言われたが、そんなの知るかと言った。

ソードマスターがこんな辺境地の戦いに参加しているなんて聞いていない。大物相手に下つ端の囃子が時間稼ぎなどできるはずがない。最初から終わりだったけれど、せめて楽に死にたかった。

ガタツと床を踏み締める硬い音が聞こえ、リカルドはひいっと小さな悲鳴を上げる。恐る恐る顔を上げると、目の前に触っただけで手が切れそうな棘のついた鉄靴が見えた。もっと目線を上げると、帝国軍の甲冑が高い壁のように聳え立っていて、リカルドは恐怖で唾をぐくりと呑んだ。

「お前一人か？」

腹にずつしりと響くようなバリトンボイス。

空気が重くなり、どこにも隙などない。

凄まじい気迫を受けて、まるで神と対峙しているかのように思えた。

「おい、一人かと聞いている」

「ひと……り……です」

手に持っている剣からメラメラと炎が上がっている。その剣先がゆっくりと動いて、カツンとリカルドの兜に当たると、サイズの合わないそれは簡単にリカルドの頭から落ちて、ゴロンと床に転がった。

「上級騎士の格好だが、まともに頭も守れない兜に、体に合っていない鎧……。お前は囃だな」

一瞬で見抜かれてしまい、言葉が出ない。リカルドはガタガタと震えていたが、それすらも許されない気がした。

「団長！ 確認しましたが、誰もいません！ もぬけの殻です……って、あつ——」

団長と呼ばれた男の背後から兵士の姿が見えた。向こうもリカルドの姿を確認したらしく、部屋に緊張と警戒が漂う。しかし、団長と呼ばれた男は片手を上げて部下を制した後、燃え滾った剣を鞘に収めた。剣に宿っていた炎が消えて、辺りの温度が下がったように感じる。

「……山道沿いに逃げたと思われませんが、追わないのですか？」

「砦に仲間を一人で残して逃げるような連中だ。弱すぎて話にならん。ここを焼き払った後、帰還する」

「その者はどうしますか？」

「そうだな……」

兜の中から鋭い視線が落ちてきて、床に膝をついたりリカルドは魂が抜けてしまったような気になった。フランティア国の兵士は、戦地で敵兵を捕らえたらその場で殺すか、晒し者にするのだと言われている。自分もその運命を逃れることはできないと思ったリカルドは、必死に握っていた壊れた剣を床に落とした。

団長と呼ばれた男は、折れた剣を一瞥したが何も言わなかった。話を聞いてくれるか分からないものの、リカルドはこれが最期だからと恐る恐る口を開く。

「あの……こんなことを頼むのは、情けないのですが……」

「なんだ？」

「ひ……火が恐くて……」

「なに？」

「火で殺すのはやめてください……」

自分でも男としてどうかと思うのだが、せめて死に方くらい選ばせてほしい。死んだ後はどう扱われても構わない。そこに至るまでが大事なのだ。できたらスパッと一撃で殺してもらえないものか。

リカルドは半泣きで、甲冑の男の兜からわずかに覗く目を祈るように見る。男がおもむろに兜を外すと、そこから燃えるような真つ赤な髪と、整った顔が飛び出した。勇ましく吊り上がった眉、大きくて形のいい唇はしっかりと結ばれている。彫りの深い目元にはキラリと光る金色の瞳があった。リカルドは思わず口を開けて、ぼけっと見つめてしまう。

同じ男だが、見惚れるくらいカッコいい。圧倒的な強者のオーラからは、殺意よりも哀れみの色を感じた。

「上級騎士のくせに情けない男ですね。今すぐ俺が叩き斬って——」

「いこ」

目の前の男はまた手を上げて、ジロリとリカルドの目を見た。値踏みされているような視線が痛

い。何をされるのだろうかと身構えていたら、男はスッと手を下ろした。

「連れて行け」

「団長……」

男が言ったことが理解できなくて、リカルドは目を見開いた。もっと広いところで殺すつもりなのかと、再びゴクリと唾を呑み込む。

男がぐるりと背を向け、長い襟足だけが結ばれた髪が揺れた。大きな背中がゆっくり離れていくところをぼんやりと見ていたら、奥にいた兵士がいつの間にかリカルドの目の前まで来ていた。

「おい、お前」

「え、あ、はい」

「名前は？」

「リ……リカルド……です」

「さっさと立ち上がれ！ ここにいると丸焼きになるぞ」

顎で促されてリカルドが慌てて立ち上がると、大き過ぎてブカブカだった鎧が体から外れてゴロゴロと床に転がった。気まずい沈黙が流れる。後から来た男も、リカルドが見せかけの囷であることとようやく気がついたようだ。さっさと歩けと言われたので、リカルドは頷いてから脛当てだけ残った中途半端な格好で歩く。

櫓から下りて広場に出ると、リカルドは腰をロープで巻かれて、そのまま馬に括り付けられた。

どうやらすぐに殺すつもりはないらしい。追い立てられるように砦から出て振り返ると、砦は真つ赤な炎に包まれて物見台が崩れ落ちていくところだった。

ここで死ぬと言われたのに、生きたまま外に出ることになるとは思わなかった。

帝国兵の隊列の一番後ろで、馬に引かれてトボトボと歩く。どこへ向かうのか分からない状況に、リカルドの腹は緊張でゴロゴロと鳴った。

「お前いくつだ？」

砦を離れたら、馬上にいる兵士の男が話しかけてきた。団長と呼ばれた黒い甲冑の男に後を任されていた男だ。先ほどまでのトゲがある声ではない。やけに親しげな声で、語尾に感じるわずかに高い音から若い男のようだ。

「二十六……ですけど」

「ええ!? 同じ歳くらいかと思った。俺はアルジェン。十九になったばかりの見習い騎士だ」

アルジェンと名乗った男は、兜を外して顔を見せてくれた。帝国人に多いとされる金髪に緑の目、人懐っこそうな顔で、よく日に焼けた肌にそばかすが似合っている。声から年下だと思ったが、外見もまだ少年っぽさが抜け切れていないようだ。

「で？ リカルドは上級騎士ではないんだろう？ ただの兵士か？」

「え……ええ、同じ見習い騎士です」

ふーんと言いながら、アルジエンは何か考えるようにリカルドを見た。同じ見習いでも、アルジエンは自分の馬を持ち、腰には立派な剣を下げている。あまりに自分と違うので、リカルドは恥ずかしくなった。

「へえ、フランティアの騎士は見習い期間が長いんだなあ。ああ、そうだ。普通に喋ってよ。リカルドは何だか丁寧過ぎる。俺、年下だし、国は違うけど同じ見習いなのに気取った喋り方をされる背中が痒くなるから」

「はい……あ、うん」

話しながら、ついさつきまで死ぬか生きるかの時間を過ごしていたが、今は信じられない事態になっていることに気がついた。自分はなぜ敵国の人間と普通に会話をしているのか、首を傾げてしまう。ちなみに、少し表現が違うものの、フランティアとアルカンターゼは同じ大陸語を使う。フランティア人は気取った言い回しを好んで使うが、帝国ではあまり好まれないようだ。

リカルドは緊張を緩めて肩の力を抜いた。

「あの……さ」

「ん？」

「俺、捕虜になつたんだよな？」

「まあ、そうだね」

「どうして、こんなに普通に話して……」

叩き斬るなんて言っていたくせに、アルジエンは親しげに話しかけてくる。帝国の人間は気性が荒く、暴力的で獣のような連中だと聞いていたのに、その印象とは少し違って見えた。

「さつきはひどいことを言っただけで悪かったな。俺も気が昂っていたんだ。今普通に話しているのは、団長が連れて行けっただけだからさ。だから部下として従うし、あの人、何でもよく拾うんだ」

「へ？」

「それによく考えたら、みんなに置いて行かれるなんて可哀想だなと思って」

なるほど。団長の話は謎だが、同情の気持ちから話しかけてくれたと聞いて、やっと腑に落ちた。今さらムキになり、情けはいらないなんて反抗する気はない。まさか捕虜になるとは思わなかったが、囮になって死ぬよりマシだ。

ただ、捕虜になったならそれなりの覚悟をしておかなければいけない。どこに連れて行かれるかわからないが、捕虜は通常狭い檻に入れられて、全ての自由が奪われる。帝国の捕虜への扱いはひどく、捕まったら自分で死んだ方が楽だと散々教えられてきた。リカルドが交渉に使えないと分かれば、きつとすぐに処分される。首の皮一枚の状態は変わらず、おそらく長くは生きられないだろう。

「これからどこへ向かうんだ？」

「帝都のある中心地から北に位置するベイリーだ。うちの騎士団は本来この辺りの管轄ではなく、年に一度の視察でこの地を訪れていたんだ。その時にフランティアからの急襲を聞きつけ、臨時部

隊として戦闘に参加した。この後本隊とは別れて、うちの隊は領地に帰還する」

「ベイリー……聞いたことがある。なんでも最強と謳うたわれる騎士団がいるとか……え、まさか？」

「他国にまで名前が知られているとは光栄だな。我々がベイリー領を本拠地とする、赤火の騎士団！ 団長のセイブリアン様は赤い炎を纏まとうソードマスターで、皇太子殿下の弟君に当たるお方だ！」

「え？」

「ソードマスターが使う炎に色があるのは知っているだろうか？ アルカンターゼには皇子が六人いるけど、その中でソードマスターになったのは、青い炎の皇太子殿下と、第五皇子のセイブリアン様だけなんだ。しかも、赤い炎を纏まとうセイブリアン様が一番強いと言われている」

リカルドはソードマスターの炎の色についてまでは知らなかった。フランティアで伝説となっている猛火の騎士は赤い炎を纏まとっていた、という話を知っているくらいだ。

つまり、第二騎士団のミケーレ団長は愚策を選び、運にまで見放されたというわけだ。たまたま視察に来ていた、最強のソードマスターが率いる部隊と遭遇してしまったのだから。王都に戻れば、部下に失敗を押し付けるだろうが、さすがにここまで兵力を失うことになったので、なんらかの処分が下されるに違いない。

もう知るか、とリカルドは思った。普段から嫌味ばかり言われていたが、上司だからと口答えせずに必死に従ってきた。だが簡単に見捨てられた今、リカルドにとつてミケーレなどもうどうでも

よく、それよりも自分のピンチをどう切り抜けるかが大事だ。

ベイリーに着いたら、牢屋に入れられて何をされるか……。拷問でも受けたらどうしようかと、リカルドはすでに胃が痛くなっていた。下つ端のリカルドが知る情報など限られている。洗いざらい喋しゃべっても、おそろく使えないと言われて終わるだろう。

トボトボと山道を歩かされ、近くの町に着くと、リカルドは荷物と一緒に荷車に乗せられた。それから歩かされることはなく、移動手段は荷車になった。

足が痛くて倒れそうだったのでとにかく助かった。道中はずっと寝ているか大人しくしていたが、時々アルジェンが水や食料を持ってきて、今どの辺りにいるかといった話をしてくれた。てっきり殴る蹴るの暴行を受けて半殺しにされると思っていたので、力が抜けてしまう。

もしかしたら、この騎士団が特殊なのかもしれない。最初にリカルドを見つけた赤髪の男——赤火騎士団の団長であるセイブリアンの指導が行き届いているのだろうか。部下達は崇拜に近い、尊敬の念を抱いているように見えた。リカルドには関係のない話だが、そのおかげで殴られることがないのならありがたい。

一週間、二週間、ただひたすら移動するだけの時間を過ごし、一月近く時間が経って、ようやくベイリーに到着した。

想像していた過酷な捕虜生活とは全く違う、快適とも言える移動生活だった。特に何かやらされるわけでもなく、ただ大人しく流れていく景色を見て過ごした。気になることといえば、時々視線

を感じることもあった。それはあの赤髪の男、団長のセイブリアンのものだ。

何か言われることはなかったが、気がつくところを見ている、鋭い視線を向けてくる。おそらく捕虜が問題を起こさないか、責任者として厳しく監視していたのだろう。若干窮屈な思いはあったが、戸惑ったのはそのくらいで、あとはずっと静かだった。

ベイリーに到着した一行は町の中心を抜けて、領主の城がある城内に入った。大きな門の近くに兵舎があり、そこでみんな馬を降りて荷物を運び始める。

「着いたあー、疲れたぜ。やっと家に帰れる」

邪魔にならないようにと荷車の端で小さくなっていたリカルドに話しかけてきたのは、アルジェンだ。

「リカルドも疲れただろう。ベイリーの町はどうだ？ なかなか活気があっていいだろう？」

「あ……うん。帝国の町はどれも荒れているって聞いていたから、驚いた……」

なんだよその情報、と言いながら、アルジェンは到着して気が抜けたのか、大きな口を開けてあくびをした。

ベイリーは聞いていた通り、首都かと思うくらい大きな町だった。市場ではたくさんの野菜や果物が並び、近くの漁村から届く海産物だけでなく肉も豊富に扱っている。子供から老人まで多くの人が活き活きと仕事をし、生活している。リカルドが知っている大きな町にはガラの悪い連中や浮

浪者が必ずいるのだが、そういった影の部分は見渡した限り目に入ってこなかった。

「活気があつて……いい町だな」

「もともと大きかったが、セイブリアン様が領主になった後に悪い連中を一扫したんだ。それで仕事が増えて、町はどんどん豊かになった。今じゃ首都はベイリーだって、みんな噂しているくらいだ」

尊敬している団長の話だからか、アルジェンは得意げに指で鼻をかきながら胸を張って答える。

「へえ、すごい方なんだな」

そう呟いてリカルドが手を少し動かすと、そこに巻かれていたロープがズルツと抜けて落ちてしまった。手枷はあつてないようなもので、巻き直してくれとこちらから頼んだが、アルジェンにはその辺に置いておいていいと言われた。捕虜を縛らないなんてありえないだろうと、仕方なくリカルドは自分で手首に巻きつけていたのだ。

リカルドは辺りを見回したが、みんな旅の片付けに忙しそうだ。ならばこのロープを使ってアルジェンの首を絞めて、逃げ出すことも……

そこまで考えて顔を上げると、アルジェンとバッチリ目が合った。

「どうした？」

「え……いや、何も……」

体格は自分とあまり変わらないので、できないことはなさそうだと思ったが、アルジェンの顔

を見たらその気持ちは萎しぼんでいった。敵国の中心近くまで来た今、ここから逃げ出すのはかなり難しい。

自国に逃げ帰ることができても、リカルドに戻る場所はない。自国では兵舎の端にある狭い物置で寝泊まりしていたし、待っていてくれる家族もない。命欲しさに投降し、捕虜になって逃げ帰ってきたと、笑い者になり処分されるのがオチだ。

「お前はこつちだ」

アルジェンにそう言われて、リカルドは大人しく付いていくことにした。

いよいよ牢屋に入れられるのだろう。リカルドはごくつと唾を呑み込んだ。この先は、食事はおろか水も飲めずに苦しむ日々が待っている。道中は何もなかったが、帝国の人間は残酷で人の心を持たない冷酷な化け物なのだ。

おそらく、そろそろその本性が現れるのだろう。本気でそう思っていた。

「そこへ座ってくれ」

テーブルの上に並んだ豪華な料理を見て、リカルドは目を瞬またたかせた。これが帝国流の捕虜の扱いなのかと混乱するあまり、背中に大量の汗が流れる。

リカルドが連れて行かれたのは城の中にある一室だった。

部屋に入っすぐ目に入ったのは、料理が置かれた大きな長テーブルだ。いい匂いがしてきて、

肉や魚、色とりどりの野菜を使った、見た目も美しく涎よだれが出そうな料理の数々が並んでいる。

テーブルの向こうには団長であるセイブリアンが座っていて、その横には長髪の頭が良さそうな顔をした男が立っていた。遠征部隊では見かけなかったが、座ってくれと声をかけてきたのは、その長髪の男の方だった。

床に座らされて、団長が美味うまそうな料理で腹を満たすところを見続けさせるといふ、精神的な責苦が始まるのか……

そう思っ腹が鳴りそうなのを堪たえた時、リカルドはアルジェンが引いてくれた椅子に無意識に座ってしまった。

「うわあつ、すみません！」

慌てて立とうとしたら、全員から何がだと言われて視線を集めてしまい、委縮したリカルドは仕方なく椅子に浅く座り直した。

長髪の男がリカルドに厳しい目を向けて口を開く。

「名前はリカルド。フランティアでは第二騎士団に所属。階級は見習い騎士で間違いないか？」

「はい」

「我々はベイリーを中心とした北部を守護している。赤火の騎士団と言われているが、正式な名称は帝国北部領騎士団となる。ここにいるお方が、セイブリアン団長。副団長は私、ルーセントだ。形式的なものになるが、質問に答えてもらう必要がある。いいかな？」

捕虜なんて縛り付けて口を割らせればいいのに、質問に答えてくれるかとわざわざ聞いてくるなんて、ずいぶんとお上品な騎士様だ。リカルドは内心で首を傾げながら、ゆっくりと頷く。

「家族は？」

「……いません」

「我々は敵国の人間を捕らえたとしても、暴力で屈服させるようなことはしない。ここまで連れ帰ってきたのは、君の安全のためだ」

「えっ……？」

「フランチアでは、敵に捕まった兵士は逃げ帰ったとしても処罰されると聞いている。それにあの辺りは狼の生息地になっているから、取り残されるということは死を意味する」

副団長のルーセントという男が淡々と話すのを、リカルドは口を半開きにして聞いていた。何を言われているのだろうかとう頭の理解が追いつかず、まるで他人事ひとことのように感じる。

「ベイリーだけで行われていることだが、捕虜は一度領に連れ帰って治療した後、本人の意思を聞くことにしている。国に帰りたいなら解放することもできるため、家族がいるという者は大体はその選択をする。止めはしない」

「解放……？ 捕らえたまま交渉の道具にすることはないのでですか？」

「我が国とフランチアは長年交戦状態だが、昨今は良好な関係に変わりつつある。末端の方ではまだ険悪な空気があるが、国の上層部は友好国として交流を進めているところだ。帝国は有利な立

場にあるので、こちらから交渉をする必要などない」

「……なるほど、そう……ですか」

末端の中の末端であるリカルドには少しも聞こえてこない話だ。とはいえ、長い歴史の中で戦い続けてきた両国が友好的な道を進むというのは、にわかには信じ難あたかった。

「今回の北東部地域急襲については国が主導したというより、そちらの騎士団が単独で動いたと情報が入っている。帝都には正式な謝罪をしたいと連絡が来ているそうだ」

「えっ……」

確かに今回の作戦は、手柄を立てたいミケーレ団長の単独行為だった。そこまで知られているなら、下手なことを言っても不利になるだけだと思えば、リカルドは素直に話すことにする。

「仰る通りです。今回の作戦は第二騎士団のミケーレ団長が強行したものです。国境付近に砦とりでを建て、難攻不落と呼ばれた地域を攻める足掛かりにしたいと……。上層部が終結に向けて動いていたとしても、ミケーレ団長は好戦的な人ですので、納得しなかったのかもしれない。私は補給部隊として遅れて参加したために、作戦の詳しい内容については分からなくて——」

ここでずっと黙ってリカルドに厳しい視線を送っていたセイブリアンが、ゴホンと咳払いをした。それが合図であるかのように、ルーセントは顎を引いて口を閉じる。

厳しい視線がより強いものになり、リカルドは心臓が冷えてぶるぶると震えた。

「もう充分だ。帝国にいる情報部隊からある程度の報告が入ってくる。正確に答えてくれてありが

セイブリアンはパンを手にとって皿に載っていたソースをつけた後、そのままがぶりと口に入れた。さつきまで上品に食べていた人が、急に豪快に食べ始めたので、ルーセントもアルジェンもポカシンとしている。リカルドはその様子を見て、もしかしたら自分に合わせてくれたのかもしれないことに気がついた。恐る恐る近くにあったかごからパンを一つ手に取ったリカルドは、セイブリアンがやったのと同じようにソースにつけてから、ガブツとパンにかぶりついた。

「ん……」

移動中は硬くて土の味しかしないパンを食べていたので、口に広がった柔らかい食感と、濃い味のソースが余計に体に染み込む。

一気に唾液が放出されて、頭の中に幸福感が溢れてくる。喜びが表情に出ていたのかもしれない。隣に座っているアルジェンにクスツと笑われた。

「美味いだろう。この食事は地下の厨房で作られていて、出来立てのものを提供している」

この城主であるからか、セイブリアンは誇らしげに言った後、今度は林檎を掴んでバクバクと食べ始めた。

「……セイブリアン様」

「遠征帰りで腹が空いているんだ。こんな物を使ってお上品に食べていられるか」

隣に座っているルーセントが眉間を手で押さえながら呆れた声を上げたが、セイブリアンはお構いなしに今度は肉を手掴みで食べる。それを見て、ルーセントはやれやれといった様子でフオーク

とナイフをテーブルに置くと、自身も手掴みで食べ始めた。アルジェンもそれに続く。

どうしていいか分からずに視線を泳がせているリカルドに、アルジェンが目で促してきたので、同じように手で掴んで食べ物を口に運んだ。

拾った敵兵にわざわざ気を遣うなんて考えられないが、部下二人の態度を見ると、もしかしたらセイブリアンは悪い人ではないのかもしれないと思った。

食事は美味しかったが、この状況が気まずくて、とにかく口に入れて流し込んだ。

食べ終わると、リカルドとアルジェンは部屋を出た。

話の流れからしばらくこの城にいられることになったが、まさか捕虜にそこまでの温情をかけるなど思ってもみなかった。

リカルドが眉を寄せながら考えていると、先を歩いていたアルジェンが足を止めて振り返った。「拾われたのがセイブリアン様でよかったな。捕虜といっても、あの方はきちんとした待遇で扱うように日頃から指示されている。だから、よく話に聞くような暴力なんてなかっただろう？」

「うん、驚いたよ……。解放するから家に帰ってもいい、なんて……」

「そういうお人なんだよ。あの風格で怯えるなつてのは無理な話だけど、お優しい方なんだ。ここにいる連中はみんな尊敬している」

あの整い過ぎた顔と鋭い目には慣れないが、優しいという意見には頷ける。ただ、自国で散々帝国人は冷酷だとすり込まれてきたので、まだ素直には呑み込めない。

「これまでの捕虜にもみんな同じような扱いを？」

「ん？ ああ、そうだな。説明したことは同じだけど……」

そこまで言つて、アルジエンは言葉を濁した。不思議に思つたりカルドはアルジエンの目を覗き込む。

「やけに優しかったような……」

「え？ 何のこと？」

リカルドの言葉に、アルジエンはハツとした表情になった。そして頭をかきながら「気まずそうに視線を逸らし、何でもないと言つて話を終わらせてしまう。明らかに変な態度が気になるが、聞いてはいけないことかもしれないと思い、あえて追及しないでおく。

「ええと、リカルドはこれからどうするんだ？ 家族はいないと言つていたけど、国に戻るのか？」
国に戻つたとして、帝国人が恐くて逃げ帰つたとバカにされるだろう。降格は確実で、見習い騎士の身分すらどうなるか怪しい。かといつてここには知り合いもないし、今のところはまだ敵国だ。これ幸いと留まる気持ちにもまだなれない。

「少し……考える」

「分かつた。じゃあ部屋に案内するよ。聞きたいことがあつたら何でも聞いてくれ。とりあえず、ここでは簡単な仕事をやらせてもらうから」

そう言つてまた歩き出したアルジエンは、城の入り口近くにある使用人が寝泊まりする部屋まで

案内してくれた。一人部屋で十分な広さに加え、しっかりとベッドまで用意されている。信じられない環境に、リカルドはまた驚いてしまった。

「狭くて悪いな。兵舎の方には空きがなくてさ。着替えや使えそうな物はあらかじめ用意されているから、自由に使つていい。良さそうな部屋が空いたら知らせるよ」

「あ……ありがとう」

「長旅で疲れただろう。お湯は共同だけど、さつき案内した地下厨房の横に用意してある。また朝に声をかけるから、今日はゆっくり休んで」

パタンとドアが閉まつてからも、リカルドはその場で立つたまま動けずにいた。

全部嘘かもしれない。気を許したらすぐに兵士が飛び込んできて、バカなフランティア人だと言つて八つ裂きにされるかも……

そこまで想像してぶるつと身を震わせたリカルドだが、物音一つしない室内の静寂を見て、ぶつと噴き出す。

わざわざ生かしてから殺すほどの価値があるだろうか。騎士見習いなどと言われていても、所属が違っただけでその辺りの兵士と変わらない。機密事項なんて知る立場になく、軍地の詳細は敵国の人間の方がリカルドより詳しく知つていそう。それなら、捕虜を丁重に扱うという彼らの信条を信じるべきなのだろうが、まだ完全に信用はできない。

「……仕事をしながら情報を集めてみるか」

体をお湯で流したいと思ったものの、あまりに疲れていたリカルドはそのまま崩れ落ちるようにベッドに転がった。考えたいことはたくさんあったが、どれもぼんやりと浮かんでは消えて、やがて深い眠りに入ってしまった。

「動物は好きか？」

「え？ 何だって？」

「だから動物だよ」

朝になり、リカルドを部屋に迎えに来たアルジエンは、開口一番に変なことを言ってきた。リカルドはあくびをする暇もなく、よく分からぬ質問に答える。

「犬とか猫のことか？ 好きか嫌いかわかれたら、どちらでもない」

「何だよ、大好きですってやつらがみんな棄権していくくらいなのに、大丈夫かなあ」

付いてこいと言われて、アルジエンの後ろを歩いていたが、困った顔で振り返られても何のことだか分からない。

リカルドは子供の頃、店の裏手で鶏を飼っていて、忙しい両親の代わりに食事の世話や小屋の掃除を担当していたが、特別鶏に思い入れがあったわけではない。掃除をしながら楽しそうに遊ぶ近所の子達を塀の隙間から眺めていて、鶏の世話が面倒だと思っていたくらいだ。だから好きかと聞かれても、はいそうですとは言えなかった。

「もしかして……俺の仕事って……」

「そう、動物の世話だ。犬が三匹、猫が二匹。あとは伝書に使う鳥もいるけど、他にも勝手に居着いてしまったやつが……何だかたくさんいたな」

「ええっ!？」

「いや、俺もてつきり厨房の手伝いかと思ったのに、副団長がそうしるって……悪いな。命令だからさ」

副団長と聞いて、昨夜会った細面の神経質そうな顔の男を思い出す。彼もまた、セイブリアンとは少し違うがリカルドに鋭い目を向けていた。頭が切れそうに見えたが、動物に関して何の知識もない素人の男を世話係にするなんて、何を考えているのだろうと思ってしまう。

「城のみんなで飼っているのか？」

「団長が拾ってきて、ここで飼うことになったんだ。獣医は近くに住んでいて、病気の時は来てくれる。世話は団長も含めて分担してやるけど、みんな遠征もあって忙しいから、専門の世話人を雇っていたんだ。でも、次々とみんな辞めちゃって……」

「……辞めた？ 給与が低いとか？」

「給与は見習い騎士よりもらえるよ。休みも自由に取れるし、待遇はいいけど……とにかく、城の奥のエリアまで行こう。実際に見た方が早い」

初日に城内で生活をする場所を案内してもらったが、上階の奥までは案内されなかった。複雑な

構造で、特殊な武器でも隠されているのかと思っていたが、どうやら違ったようだ。

城内を繋ぐ回廊を通り抜けて、兵士が立っている格子のドアを抜ける。その先にある大きな鉄扉をアルジェンが押し開けると、そこには城の中とは思えない光と緑の世界が広がっていた。

「すごっ……ここ……森!? 木がたくさん……川まで流れているけど」

中庭と呼ぶには豪華すぎるほどの大きさだ。天井は吹き抜けとなっていて空が見える。床に敷き詰められているのは土と砂利で、青々とした草が草原のように広がっていた。木々も並んでいるが、まるで森のようだ。

リカルドがボカンと口を開けて大自然を眺めていると、頭の上でニャンと鳴く声が出た。顔を上げると、近くの木の上からぴよんと二つのかたまりが飛び降りてきた。

「おっ、さっそくお出迎えか。白い方がウメ、グレーに黒い線が入っているのがシマだ」

新入りのリカルドを大きな丸い目でじっと見つめてきたのは、二匹の猫だった。二匹ともフサフサの長毛で、優雅に地面を歩いてリカルドに近づいてくる。

「珍しい長毛種で、貴族の間では高額で取引されている。密売業者が劣悪な環境で飼育していたのを発見して、ここで保護することになった」

まるでドレスのような長い毛がふわふわと風になびく姿は、歩く貴婦人のように見える。あまりの美しさに言葉が失っていると、二匹はリカルドの足元まで来て背中を擦り付けてきた。

「わっ、こ、これ……どうしたらいいんだ?」

「珍しいな。この子達は人懐っこいけど、初めての人間は警戒して近づかないんだ。ほら、こうして優しく背を撫でてあげるといいよ」

猫に触れるのも触れられるのも初めてだったリカルドは、アルジェンに教えてもらった通りにウメとシマを撫でた。猫達は柔らかくてふわふわで、まるで砂糖菓子のようなだ。ガサツな自分の力では壊してしまいそうで、少し怖い。

ウメとシマはしばらくリカルドの足元でコロコロと転がっていたが、新人への挨拶が終わったのか、またぴよんと高い木の上に戻ってしまった。

「ウメとシマは大体木の上か、あそこに見える小屋にいる。食事は一日二回、食堂から『猫』と書かれた餌の入った箱を持ってきて、中身を小屋にある皿の上に乗せておけばいい。餌やりについては他の動物も同じ手順だ」

「わ、分かった……って、本当にやるんだな……」

ここまで来たものの、自分のような素人が動物を相手にして本当に大丈夫かと心配になってしまふ。とりあえず、ドアを開けっぱなしにしたら大変なことになる、というのだけは理解した。

飼育場の入り口付近には倉庫があり、そこに掃除道具が揃っている。隣には水場もあり、洗いや飲み水の交換も全てここで行うと説明を受けた。朝、飼育場に来たら掃除をして、可能なら動物達の体を見て健康状態をチェックする。餌の時間が終わったら一緒に遊びながらブラッシングし、小屋が汚れていたなら随時清掃、そして夕食を与えればリカルドの仕事は終了らしい。

流れだけを聞いたなら、それほど大変な印象は受けない。途中で自由に休憩を取っていいというのも魅力的だ。ここで昼寝をしても誰も怒らないというのに、本当にこれで人が辞めていくのだろうか。

「と、まあ……ここまではいいんだけどね」

そう言つてアルジェンが目を向けたのは、猫小屋の横にある通路だった。

「ええと、あそこを通ると——」

「ちよつとビックリするかもしれないけど、噛まれたやつはいないから……」

なんとも恐ろしい台詞を吐かれ、リカルドは嫌な予感に寒気を感じた。大丈夫だからと言われて、アルジェンに背中を押されながら通路を歩かされる。

開けた場所に出ると、先ほどより大きな小屋が見えた。二人が近づいた途端、ヴヴヴ……と低い唸り声が聞こえてくる。

真つ黒な小屋の入り口からカチャカチャと音がした直後、ヌツと黒くて大きな影が飛び出してきて、リカルドはひいひいと悲鳴を上げた。

「えー、こちらがワンちゃん……ケルちゃん、ベルちゃん、ロスちゃんです」

「う……嘘だろ……っ」

現れたのは、三匹の犬だった。犬だと思つるのはそう紹介されたからで、見た目は全く違った。地獄の番犬か、狼のような形をした巨大な怪物と言われた方がすんなり受け入れられそうだ。三匹と

も背丈はリカルドよりも大きく、大きな頭にグレーの体、顔は犬の形をしているが、凶悪な顔つきで涎を垂らしながら威嚇のような声を上げている。周囲を囲っている頼りない細めの柵が簡単に壊れてしまいそうに見えた。

「こ……こわつ、恐いって！ ムリムリムリ!!」

「だつ、待て！ 団長が人を襲わないようにちゃんと躡けているから大丈夫だよ。ちよつと……甘噛みくらいはあるけど……」

「甘噛みって！ あの口に甘噛みされたら体がなくなるって！」

「はあ……そうだよなあ……。そう言つてみんなここには近づけなくて、辞めていくんだよ……」
襲いかかりそうな顔つきでゆっくり近づいてきた三匹は、一定の距離まで来るとその場に座つた。意外に大人しいのかと思つたものの、目が合うとグルグルと唸り声を上げるので、やはり無理だとリカルドは震え上がる。アルジェンにすっかり腕を掴まれているから叶わなかったが、そうでなかつたら一目散に走つて逃げたと思う。

だが、背中を丸めてため息をついているアルジェンを見て、なんだが申し訳ない気持ちになったリカルドは、とりあえず彼の話を聞くことにした。

「この子達は？ どういう経緯でここに？」

「子犬の時に森に捨てられていたんだ。古来種で闘犬として利用されることが多いんだけど、獣だった頃の本能が強くて、飼育するのが難しい。だから飼いきれなくて捨てられたんだと思う。成

長するとこの迫力だけど、子犬の頃はごく繊細で体が弱い。倒れているところを通りかかった团长が見つけて、連れて帰ってきたんだ」

話を聞くと、どの動物もセイブリアンには懐いているようだ。しかし世話係として、この狂暴な犬達の世話をするというのはどう考えても難しいだろう。

パクパクと口を開けながらどう断ろうかと考えているリカルドを見て、アルジエンはとりあえずこつちに来てくれと言い、リカルドの腕を引っ張った。

「いったん、ワンちゃんのこととは忘れよう」

「忘れられるか！」

「こつち、こつち、ここが鳥小屋だ。伝書鳥に使われる大鳥に、他にも勝手に住み着いているのがいるけど、こいつらなら大丈夫だろう？」

リカルドが連れて来られたのは、天井まで網が伸びていて、外と自由に行き来ができるようになっていた鳥小屋だった。大人が五、六人入っても十分な広さで、中は餌箱や羽を休める場所、卵を温められそうな小さな部屋がいくつもある。居心地が良さそうに鳥達のがんびりしていたが、リカルドとアルジエンが小屋に入ると、なぜか一斉に視線が集中した。

「ええと……この子達もその、团长が……」

「そう、地面に落ちていた大鳥の雛を拾ったんだ。大鳥は巣から落ちた雛には二度と関心を示さない。戻そうとしたら突いて暴れるくらいなんだ。团长が拾ってきて、ここで飼うことになった」

「へえ……って、なんかすごい見られていないか？」

「え？ リカルドを初めて見るからじゃないか？ 俺も鳥小屋にはあまり近づかないから……」

ビィイと大きな声が聞こえた直後、鳥達が一斉に飛び立ち、小屋の中をグルグルと回り出した。

「うわあああつっ！」

「うえっ！ ごっぼっ、や、やめてくれ——！」

二人は絶叫して地面に座り込んだ。頭から背中まで嘴で突かれて地味に痛い。しばらくそのまま耐えて、バサバサという音がやつと止んだ後に、恐る恐るリカルドは目を開けた。

「……リカルド、無事か？」

「ああ。いったん出よう……」

自分達の状態を確認した二人は、下を向いたまま力なく小屋から這い出た。アルジエンの姿を見たら、頭から足まで鳥の毛と糞まみれになっていた。もちろんリカルドも同じだ。髪の毛からポタポタと何かが垂れているが、今は何も考えたくない。

「……案内はもういいな。一番近い洗い場に行こう」

「了解」

後から聞いた話だと、世話人は大体この洗礼にあつて、心が折れて辞めていくそうだ。猫達はいいとしても、恐ろしい猛犬と糞まみれになる鳥小屋の世話があるのならば、人が続かないのも納得がいく。

飼い主であるセイブリアンと獣医の前ではみんな大人しくしているらしいが、他の人間が来ると散々な目に遭わせるらしい。向こうからすると人間を試したり、遊んでいたりするだけなのかもしれない。とにかく、リカルドは自分には無理だからと早くここから逃げたくなった。

翌朝、しつかり起こされたリカルドは、動物の世話係として飼育区画に連れて行かれた。

アルジェンは忙しいらしく起こしに来たのは別の男で、リカルドはちよつと待つてくれと粘ったが、話を聞いてもらえなかった。あとはよろしくと言われて中庭に放り込まれる。気持ちを整理する時間もないのかと絶望したが、考えてみたら自国でもやっていたのは似たようなことだった。

命令されたら朝から晩まで下水道の掃除をさせられたり、酔っ払いの世話をさせられたり。治安の悪い場所で夜間警備を一人でやらされたこともあった。人間相手でないだけ、マシかもしれない。どの道、どこかで生きていかなくはないなら、与えられた場所で精一杯やってみようと、リカルドは気持ちを切り替えた。

それに、ある物で何とか工夫をして上手くやるのは、リカルドの得意とするところだ。動物達に丸腰で対応したら昨日のような目に遭うことは容易に予想できる。ならば、こちらも準備をするまでとリカルドは鼻息を荒くし、掃除用具が入った倉庫を開けた。中にある物は好きに使っていいと言われている。

「……よし、これなら使えそうだ」

工具箱を発見したリカルドは、ニヤツと笑って腕をまくった。

しばらくして、準備万端の状態でのしとリカルドが歩いていると、猫のウメとシマが木の土から見下ろしてきた。また来たのかという顔でじつと見た後、すぐに興味をなくしたのか、そっぽを向く。昨日は人懐っこく足に絡んできたのにツレないなと思いつながら、リカルドは猫達の小屋に入った。

清潔にしてくれと言われていたので、箒ほうきで中を掃いた後に水拭きして、布は洗濯に回し新しいものと交換する。厨房から持ってきた猫用の餌を設置して、水も新しいものと交換した。

近くに来てくれないのでよく見られないが、猫達は健康そうなので、とりあえず次に行くことにする。リカルドは用意した荷物を担いだ後、気合を入れて鳥小屋に向かった。

昨日は鳥の多さに圧倒されたが、考えてみたら子供の頃に世話をしていた鶏の数が増えただけだ。リカルドは鳥小屋の前で立ち止まると、荷物の中から倉庫で見つけた木箱を取り出して頭にかぶった。木箱はあらかじめ目の辺りを工具箱にあつたノコギリでくり貫いて視界を確保している。あとは布を繋ぎ合せて作った特製マントを着ければ完成だ。

リカルドが餌を持つて登場したのに気づいた鳥達は、バサバサと羽を広げて臨戦態勢に入っている。小屋に入ると、昨日と同じく大きな鳥達が騒ぎ始めて、あつという間に周りを囲まれた。頭を嘴くちばしで突かれても、木箱が守ってくれるので問題は無い。

警戒してカチカチと盛大に嘴くちばしを鳴らしているが、リカルドは気にせずに餌箱の周囲を簡単に掃

除して、新しい餌を入れた。すると、ほとんどの鳥はそちらに向かう。その隙に残りの場所の掃除も終えて、手早く外へ出た。

「……よし、できた……」

突かれて糞だらけになる毎日を想像したら、ゾツとしたが、考えを変えるだけで物事が上手く進むこともある。鳥小屋から出たリカルドは昨日と同じ糞だらけだったものの、それは防具を脱げばいいだけの話だ。頭にかぶっていた木箱と体を覆っていたマントを外したら、手足がわずかに汚れただけだった。ここまでは寝ながら考えていた作戦通りで順調だ。

思わず顔が綻んでしまい、やったぞと叫び出した気持ちになったが、最後の大物が控えている。あれに関しては無傷で帰れる自信がなく、リカルドは逃げ出したい気持ちを抑えてゆつくりと歩き出した。



執務机に向かい、セイブリアンは山のように積まれた書類にサインをしていた。黙々と作業していると、後ろからハアとため息をつく音が聞こえてくる。

「先日の食事会のことですが、まだ頭が痛いです。セイブリアン様を手掴みで食事をしたなど、皇宮の連中に知られたらなんと言われるか……」

副官のルーセントはいつも眉間に皺を寄せているが、最近はそのため息までよく加わるようになった。

「食事の作法まで気が回らなかったな。アルジェンに少し教えてやるように言っておこう」

「それにしても今度は人ですか。しかも敵国の人間を拾ってくるなど……」

いつも捕虜の待遇や管理についてはルーセントに任せていたが、今回は自分も同席したいと言ったことで、聡いルーセントにはすぐに見抜かれた。

セイブリアンは顎に手を当て、背もたれに深く体を預ける。

「分かっている。でも仕方がなかったんだ。あの潤んだ目が、アイツに……似過ぎていて」

そこまで言って口元を手で覆い隠すと、窓辺に立っていたルーセントがまた大きなため息をついた。そこに、もう勘弁してくださいという思いが込められているのを感じ、セイブリアンは悪いなと小さく言う。

「まあ、いいでしょう。ちょうど動物の世話係が辞めたので、あの男にその仕事を与えました」

「また世話係が辞めたのか？」

「ええ。団長と医師には懐いています、それ以外の者の言うことを聞きませんからね。彼は他国の人間ですし、すぐに辞めたいと言いつつも出さずかもしれません。その後、どうするかは本人に任せます」

「……」

「これ以上、特別扱いはできませんよ。怪我を負っているわけでもないのに、働かない者をここには置けませんから」

せめて他の仕事ではダメかと言おうとしたが、ルーセントは先に目でダメですと返してくる。「もう遅いので失礼します。セイブリアン様も早くお休みください」

話し合いは終わりとはばかりにルーセントはサインが終わった書類を抱え、頭を下げて部屋を出て行った。静かになった部屋で、セイブリアンは深く息を吐く。

ついに他国の人間まで拾ったかと言われたが、返す言葉がなかった。傷ついた敵兵を連れ帰ることはこれまでもあったが、いつもは部下に任せていて、直接関わることはない。

今回は自分が最初に見つけて声をかけたからか、やけに気になり、あれこれと指示していたら部下から少し落ち着いてくれと言われてしまった。仕方なく遠くから見守るだけに留めたものの、帰りの道中ずつと様子を知らなかった。話をするなら食事に呼びたいと言った時もルーセントから嫌な顔をされたが、気になるのだから仕方ない。

今も団長として威厳を持って仕事に励んでいるものの、気を抜くと元来の世話好きな性格がむくむくと起き出して、つい手を出しそうになる。

敵の岩ちいから拾ってきた男——リカルドは、どこにでもいそうな容姿で特に目立つものはない。背もそれほど高くなく、騎士見習いにしては細いくらいの体格だ。初めて会った時はひどく怯おそえていて、彼の黒い髪と濡れた黒い瞳が切ない記憶を呼び覚ました。

怯おそえている者を殺すことなどありえない。置いていくこともできなかった。フランティアでは、戦場から逃げ帰った者を容赦しないと聞いている。特に立場が弱ければ、負け戦いっくせにおいてあらゆる失態を押し付けられるだろう。無事に母国に辿り着いたとしても、命が危ないと思われた。

だから一度連れて帰り、落ち着いた環境の中で好きな道を選ばせようと考えた。城に到着したら少し緊張が解けたように見えたが、まともに目を合わせてはくれなかった。そのことを残念に思う気持ちはぼつと胸に浮かび、セイブリアンは慌てて首を振って考えを散らす。

「しっかりとしろ。今は大事な時だ」

この一件は、友好に傾きかけたフランティアとの関係に水をさすことになるだろう。向こうから仕掛けられたことだが、セイブリアンとしては騒ぎを大きくしたくはなかった。なぜなら、長い協議と争いの末、ようやく兄である皇太子の即位が決まるうとしているところだからだ。

皇帝だった父親が崩御してから三年。その間皇位が空だったのは、皇宮内に殺伐とした争いが勃発し、皇太子の即位を阻む動きがあったためだ。第五皇子であるセイブリアンも巻き込まれてしまい、心が休まる日々などなかった。派閥がぶつかり合い、生まれては消え、ようやく話が纏まとまりそうという時に、これ以上長引くようなことは避けたい。

「……シア」

腕の中にあつた懐かしい温もりを思い出して、セイブリアンはそつと目を閉じた。

翌日、朝一で届いた手紙を読み終えたセイブリアンは、指で綺麗に二つに折り、机の上に置いた。そして机に両肘をついて頭に手を当て、深いため息を吐く。

ついに終わった。皇太子の即位が決まったのだ。だが、待ちに待った知らせだというのには少しも晴れない。むしろ胸に大きな穴が空いて、冷たい風が吹き抜けている。しがらみから逃れるために剣を持ち、がむしやらに生きてきたが、少しも手足が軽くなったように思えないのはなぜか。かつて孤独だった自分を包み込んでくれた温かさを思い出し、セイブリアンは手をぎゅっと握り込んだ。

剣を極めた者、ソードマスターとなり、炎の剣気を使えるようになった。

戦場に立てば神のように羨望の眼差しを受け、慕ってくれる部下はたくさんいる。

しかし、心は少しも満たされない。人生の大半を戦場に身を置いて過ごしてきたが、残ったものは何もなかった。いや、もつとずつと前に失ったまま、ただ生き長らえているだけかもしれない。

「……疲れたな」

静かな部屋に、自分の声だけが響き渡る。それが無性に悲しくて、虚しい気持ちになった。

真つ暗で空つぼの未来しか見えない。そんなものに向かつて進んでいくことに、何の意味があるのか。そう思つて再び息を吐いた時、頭に浮かんできたのは潤んだ黒い瞳だった。そういえばあのフランティア人——リカルドはどうしているだろう。

城に戻ってきて一週間。ルーセントが仕事を与えたと言っていたが、上手くやっているのかと少

し心配になる。自分の前では、ひどく怯^{おそ}えていたが、部下のアルジェンとは打ち解けており、時々笑顔を見せて話していた。

フランティア人らしい黒髪で特徴はないが、なぜか目を引く男だ。厳しい環境の中でも、彼の目が活き活きと輝いているように見える。帝国人は野蛮だと聞いていたからだろうか、少し親切にされるだけで泣きそうな顔でお礼を言っている姿を見て驚いた。

ベイリーに入ってから、初めての外国という顔でキョロキョロと辺りを見回して、目を輝かせていた。そんな様子を見て、微笑ましい気持ちになった。

「……少し、様子を見てくるか」

ルーセントからは、団長職にある者が率先してフランティア人と親しくするのは良くないと言われていたが、これも仕事の一環だと言える。

今の時間は飼育区域にいるはずだ。

ガタンと音を鳴らし、椅子から立ち上がったセイブリアンは部屋を出た。久しぶりに彼と話せると思うと、どうしてか足が軽くなる。ドアを開める時に机の上に載せた手紙が目に入ったが、先ほどの憂鬱^{ゆううつ}な気持ちが少しだけ薄れたような気がした。



人生において、世界を逆に見る、という経験は必要なのかもしれない。時には見えなかったものが見えてくる——そんなことを偉い学者が言ったかどうかは知らないが、リカルドには地面と空が逆になっている光景が新鮮に思えた。さすがに毎日だと飽きるが……

「何を……しているんだ？」

耳に響く低い音が聞こえてきた時、最初は幻聴かと思った。それくらい長い時間ぶら下がっていたからだ。

「ケル、ベル、ロス!!」

大きな声に驚いてビクツと揺れた反動で、リカルドは頭から地面に落ちた。オマケとばかりに口を開けたベルの涎よだれが落ちてきて、頭にベチャツとかかかってしまった。

「大丈夫か！ 怪我はないか？ まさかこんなことになっているとは……」

地面に落ちた痛みはなかったが、涎よだれのせいで視界が悪くなっている。目の周りを擦ると、視界いっぱい広がったのは、あのセイブリアンの顔だった。落ちたことよりそちに驚いて、思わず声を上げそうになる。

「犬達は体は大きいが、気弱で大人しい性格なんだ。まさか人を食べようとするなんて……本当にすまない！ 今医者を——」

「いつ、いえ、大丈夫です。誤解しないでください。遊んでいたんです」

「は？ 何を言っているんだ？ 頭を打ったな、すぐに横になって冷やした方がいい」

「本当に大丈夫なんです！ ほら、この通りです」

医者と呼ばれたら大事おおじこになってしまふ。リカルドは急いで立ち上がり、セイブリアンに問題ないところを見せた。

「最初はすごく威嚇いかくされていると思ったけど、仰る通り、怯おそえているだけだと気がついたんです。それで、どうにかして仲良くなろうと思いついた遊びの一つで……」

世話係として配属されて三日目。

リカルドはついに犬達に近づくことに成功した。それまではひたすら隠れながら餌を餌箱に入れたり、掃除をしたりと逃げ回っていたが、犬達は唸うなるばかり。今にも噛みつかれそうな勢いで、怖いと震えていたリカルドだったが、ふと自分よりも犬達の方が震えていることに気がついた。アルジェンに聞くと、闘犬として使われることになったのは近年のことで、それまでは人前に姿を見せることなく、山奥の村でひっそりと飼われていたらしい。試しにリカルドがゆっくり近づくと、意外にも大人しく撫でさせてくれた。危害を加えないことを証明するために、その後も犬達の近くで寝っ転がったり、一緒に食事をしたりしてみると、犬達の唸り声はなくなった。

ふと思ったのは、今までの世話人達は彼らを従わせようとかかしていたのかもしれない、ということだ。怒鳴ったり、大きな音を出したりして怖がらせたことで、より臆病になっていた可能性は高い。

こうして徐々に距離を縮めたりカルドは、布を紐で縛って丸くしたものを玩具にして、犬達と遊

ぶことに成功する。しかし、犬達は体が大きいので、遊び方も激しかった。最初は布玉を口に咥えて走っていた三匹だったが、リカルドに慣れてくると、遊んでくれと飛び上がりアピールしてくるようになった。一匹ずつ順番に布玉を投げて持ってくる遊びを繰り返し、それぞれが満足するとクンクン言いながら三匹でリカルドを舐めてくるのだ。

最初はただ舐めていたが、そのうち甘噛みになって、リカルドの足を口に入れた一匹がそのままぶらんと持ち上げたことで、それが彼らのお気に入り遊びになったらしい。リカルドからしたら、やっと仲良くなれた嬉しさと、吊されてもそれほど痛くないことで、大人しく彼らの玩具になっていたのだ。

「……というわけで、遊んでいるだけでして……」

「やめてくれ、心臓が悪い。凶暴化して襲われているとしか見えない」

リカルドの前に立つたセイブリアンは、三匹に人を口に咥えたらダメだと言いつ聞かせた。三匹は怒られたのでシュンしたような表情になり、それぞれ尻尾を丸めて小屋に入っていく。

「体は大きいけど、まだ成犬というより子犬に近い。間違えて牙を立ててしまうかもしれないから、今後はしないように」

「分かりました……すみません」

「いや……よくやってくれている。犬達とあんなに仲良くなれたのは、俺と獣医以外はお前が初めてだ。ただ、怪我をしたら心配なんだ。強く言っただけで悪かった」

「い……いえ、そんな……」

まさか心配されると思っていなかったもので、リカルドは驚いた。食事の席でも無作法だったリカルドを庇ってくれたようだったので、本当は怖い人ではないのかもしれないと思っていた。こうやって実際に話してみると、やはり見た目は厳ついが、優しくそうな人に見える。

近くにあった布を持って近づいてきたセイブリアンは、後でちゃんと洗ってくれと言って、リカルドの頭をゴシゴシと拭いてくれた。

「いつもここに来るのは仕事を終えてからになるが、しばらくこの時間に様子を見に来ることにしよう」

「え？」

「お前の仕事を疑っているわけではない。城に戻ってきて、やっと落ち着いたところだ。動物達の世話も自分でできることはやりたい」

飼い主なので、本人がやる分には何も言うことはない。そうなるかとセイブリアンと頻りに顔を合わせるようになるが、今日話したことで少しだけ打ち解けたような気持ちになったので大丈夫かもしれない。

「お前とも話がしたいと思っていた」

「え？ わ、私と……ですか？」

「ああ。よろしく頼む」